
My Spotlight

綾瀬愛那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Spotlight

【Nコード】

N6346Y

【作者名】

綾瀬愛那

【あらすじ】

高校生デビューしたての栄&飛鳥の幼馴染コンビは、期待と不安を胸に私立女子高の演劇部に入部した。キャラの濃すぎる部員や友人達に囲まれたドタバタで愉快的部活ライフ！女ばかりだから恋愛色は無いけれど、こんな青春も良いんじゃない？

他サイトのブログで連載した作品を一部改定、編集したものです。ストーリー大筋は変えていませんが言い回し等はかなり変えてあります。

・ Prologue 春 今日、はじまりの風が吹いた

私はたった一人、暗い舞台上に立っていた。

手を前に突き出せば指先が届きそうなほどの位置にある緞帳じゆとけいがするすると上がっていく。それにつられて、私の胸は早鐘のように高鳴る。

頭上のライトが点き、一步前が眩しいくらい明るくなった。

目の前にある、キラキラ輝く華やかな空間。私は顔を上げ、その中央に一步踏み出した。

「さーかーえっ！あれ、寝てる。もう、部活行くよー？」

聞きなれた声が頭上で自分の名前を呼んでいるのが聞こえて、教室で机につつぷして居眠りしていた神谷栄かみやさかえはぼんやりと目を覚ました。午後の教室は日当たりが良く、廊下よりの席でも意外と眩しい。数回瞬きしてみたが、まだ頭が寝ぼけてる。

「まったくもー、部活行くよってば。さっちゃん起きて！おい、栄！」

いらついてきたのかだんだん大きくなる声。栄はゆっくりと頭を持ち上げた。

「何なんだよう……」

「部活初回から遅刻する気なのかっつーのよ莫迦バカ。」

セリフと同時に頭頂部に拳が降ってきて、せつかく持ち上げた頭は机にぶつかってごつんと鈍い音を立てた。

「痛あ！」

「わあ、すごい音。」

栄の悲鳴に、相手は悪びれる様子もなく平然と言う。さすがに堪りかねて、額を押さえてキツと相手の顔を睨んだ。

「何すんだよ飛鳥あすか！」

「あ、起きたあ。」

満面の笑みでそんなことをたまったのは、隣のクラスの西原飛鳥。小動物を思わせる細面な顔に大きめの瞳、小柄で色白、肩にふんわり掛かる黒髪と、少女マンガに出てきそうな可憐で儂げな外見の女の子だ。しかし親しくなればなるほどそんな第一印象と遠ざかっていくような性格の持ち主だった。栄は一度だって飛鳥のことを儂げだなんて思ったことはない。栄と飛鳥は家が隣同士で、物心ついた頃からの幼馴染なのだから。

「ほら行くよ、準備して。大体これから部活行くつてのに本気寝しないよね。」

声も高めで女の子らしい。男になら文句さえも可愛く聞こえるんだろうな、なんてチラツと思った。

栄はそんな幼馴染とはまったく似ていない。そんなに男っぽいという程ではないがショートヘアに太めの眉、太つてもいないが痩せている訳でもなく、顔立ちなどもまあ平凡だと言えた。ただ飛鳥と比較されるのと少々喧嘩っ早い性格の所為で男っぽいなどと言われるのだろう。もともと栄自身、自分を女らしいと思ったことがないのだが。

二人が喋っていると、栄のクラスメイトの一人がひょいと顔を出した。

「あれっ、あーちゃん！えいちゃんと知り合いだったんだ。」

「志茂ちゃん。飛鳥のこと知ってたの？」

栄はちよつと驚いて答える。にっこりと頷いた彼女は、栄の隣の席の志茂安芸子^{あきこ}。高校に入った初日に栄に話し掛けてきてくれた子だった。長い黒髪は綺麗で真っ直ぐで、ふくよかな笑顔はどこか日本人形を思わせる。和服なんか着せたら似合いそうだ。

「安芸ちゃん。そっか、このクラスだったね。」

飛鳥が彼女のほうを振り返った。なんだか妙に楽しそう。そして事情説明を求める栄の視線に気付いて双方に紹介するように言った。

「安芸ちゃんは中学で三年間同じ委員会、栄は幼稚園も小学校も同じ幼馴染なの。すごいなー、お互い知らなかったのに友達になっ

たなんて。なんか縁あるのかもね。」

ふふつと笑う飛鳥。栄はふーんと相槌あいづちだけ打って聞き流した。

「飛鳥、お待たせ。行こつか。志茂ちゃん、また明日ね。」

「うん、私は帰るね。部活がんばって。」

笑顔で手を振る安芸子に見送られて、二人は並んで歩き出した。

部室に向かって歩いていている途中、ちょうど中央階段の近くを通りかかった時だった。

「おーい、栄じゃないか！ 久し振り！」

唐突にそんな大声が聞こえ、振り向く間もなく後ろから抱き付けられた。でも、誰だかは声で分かる。

「か、華奈先輩かな！？」

「おう！ ようこそ宮高みやこうへ！」

キラッキラの明るい笑顔が、かなり高い位置から二人を見下ろしていた。こうしていると、この笑顔が太陽に例えられるのも分かる。

華奈先輩 十条華奈じゅうじょう かなは二人の小学校、栄の中学校の先輩で一つ年上。ちなみに栄は小学生バスケットチームでもお世話になった仲だった。身長160センチ弱ある栄よりさらに20センチばかり高いバスケット部のエースだ。今も宮高バスケット部と書かれたユニフォームに身を包んでいる。宮高というのはここ、私立宮ヶ丘みやがおか女子高校の略称だ。

「わあ、お久し振りです！ 私のことも覚えていらっしやいます？」

「もっちゃんよ、飛鳥ちゃんですよ。小学校卒業以来だから、四年ぶり？ 懐かしいなあ。」

そう言って二人の肩を同時に痛いくらいぽんと叩く。

「二人とももう部活決めたでしょ。どこにした？」

「演劇部です、中学と同じく。」

笑顔で答えた栄に華奈はそっか、と呟いた。なんだか妙に嬉しそうだ。

「うわー、楽しみだな。観みに行くからさ。あ、そうだ、部長たちにはもう会ったの？」

「いえ、今日、今から初回なので……」

どうしてそんなコト聞くんだろう、と飛鳥がきよんとして答えると、華奈はいっそうニコニコして言う。

「そうかー、じゃあ会うの楽しみにしてな。あいつらとは知り合いなんだけど、何て言うか、すごい奴らだから。」

いつになくもったいぶって言う。二人が顔を見合わせていると、腕時計をチラッと見た。

「あ、やっべ。部活行かなきゃ。あんた達も遅れないように行けよ。」

「そう言って二人が返事する間もなくダッシュで行ってしまった。しはしポカンとした後、二人はやっと我に返って駆け出した。きっと何かが二人を待っている、宮ヶ丘女子高演劇部へ。」

・ Prologue 春 今日、はじまりの風が吹いた（後書き）

初めまして、綾瀬愛那と申します。

プログラムの段階であとがきというのも変な気はいたしますが、ちよつと書きたいことがあつてペンを取り…いや、キーボードを叩きました。

まず、お読みいただき誠にありがとうございます。なにぶん小説投稿は初心者ですので拙い部分も多々あるとは存じますが、大目に見ていただければ幸いです。

それと、この小説の続きですが、少々お待ちいただく事になるのではないかと先にお断りしておきます。

作者は遅筆で、おまけに学生という身分のため執筆に十分な時間を割けずにあります。これはひとえに私が不器用だという話なのですが、それでも続きを気長に待つてくださる方がいらつしやいましたら作者にとってこれ以上嬉しい事はございません。

では。この栄と飛鳥たちの物語がもしあなたのお気に召しましたなら、またいつかお目にかかりましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6346y/>

My Spotlight

2011年11月20日05時02分発行